

南僧尾A・B地点発掘調査概要

1976

神戸市教育委員会

目 次

a . A 地点	3
b . B 地点	4
c . 炉跡および鉱滓	4
d . 分析結果	6
第1図 発掘地点位置図	2
図版 (1) A 地点遠景〈南から〉	8
(2) A 地点近景〈北から〉	8
(3) A 地点 〈北から〉	9
(4) A 地点炉址および焼石〈北から〉	9
(5) A 地点炉址〈南から〉	10
(6) A 地点炉址出土鉄片	10
(7) B 地点遠景〈北から〉	11
(8) B 地点近景〈南から〉	11
(9) B 地点第4～第11トレンチ〈南から〉	12
(10) B 地点発掘風景	12
(11) B 地点第1～3トレンチ〈北から〉	13
(12) A 地点墓址実測図	14
(13) B 地点出土須恵器	15
(14) A・B 地点出土遺物	16

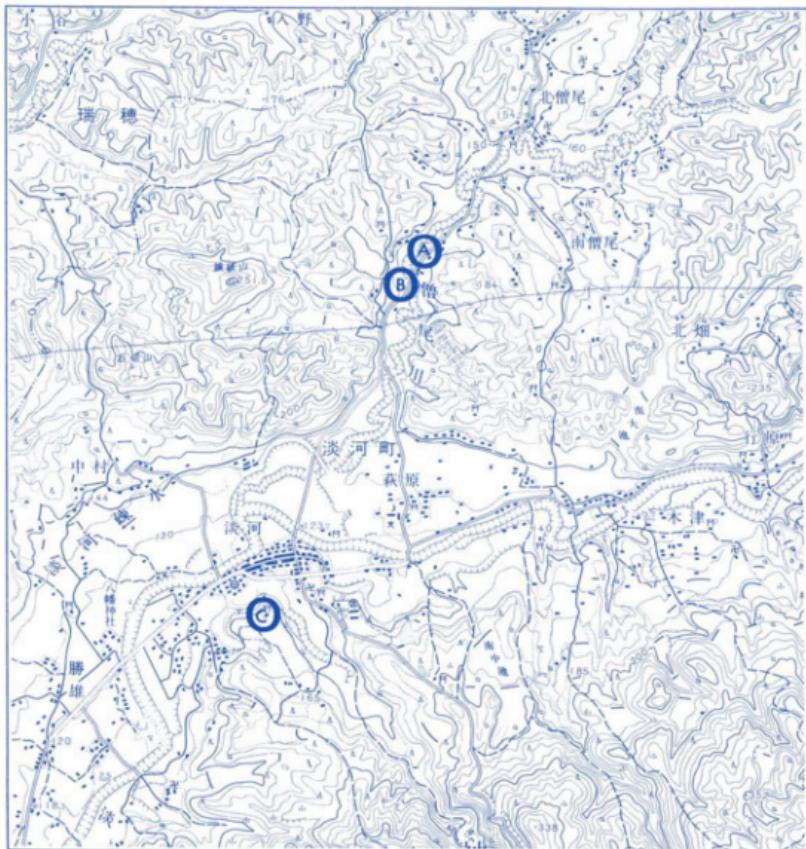
（例 言）

本書は、神戸市教育委員会が、
神戸市土木局の依頼を受けて実施
した一般県道淡河吉川線道路改良
工事にともなう神戸市北区淡河町
南僧尾A・B 地点の埋蔵文化財確
認調査に関する概要である。

調査は、神戸大学工学部助教授
多淵敏樹氏を団長とし、神戸市教育
委員会文化課学芸員宮本都雄を現
場主任として、昭和50年8月16日
より9月17日まで実施した。調査
にあたっては神戸大学工学部工作
技術センター八木哲三氏および神
戸製錠所中央研究所の協力を得た。

（発掘調査参加者）

多淵敏樹・八木哲三・喜谷美宣・
宮本都雄・奥田哲道・浅岡俊夫・
中村善則・丸山潔・阪下明・安井
俊明・皆木国義・田嶌和仁・田中
憲一郎・角谷政美・谷邦子・杉尾
健三郎・宝川一紀・岡本孝志・下
田勲



第1図、発掘地点位置図（Aは南僧尾A地点、Bは同B地点、Cは淡河城跡）

南僧尾A・B地点発掘調査概要

a. A 地点

所在地 神戸市北区淡河町南僧尾字鍛治屋垣内

淡河町は海拔200～300mの山々に囲まれた小盆地にあり、盆地の中央部に淡河川が流れ、盆地を囲むように淡河城址・勝雄城址などの山城址が点在している。

A地点は、このような環境にあるが、昭和25年頃畠地が崩壊し、鍛治場の炉址らしき焼土が露出し、地主の下田勉氏がこれを確認している。この地点は現在も鍛治屋垣内という字名が残っており、ここに中世刀鍛冶作業場址が存在したと推定された。

今回、淡河吉川線幹線道路拡幅工事予定地にあたるため、発掘調査を実施した。

調査は、下田勉氏が焼土を発見した地点を中心tronチを設定したが、地山は北側で20cm、南側では50cmで、南がやや低くなっている。この南側先端部で約1m程度の焼土および焼石が半楕円形でピット状に残存していた。このピットは下田氏が確認したものと同一であるとの証言を得て精査した結果、長さ1.2m、幅は広い所で70cm、狭いところで50cm、深さは約20cmで北が高く南が低くなっていた。ピットの壁および床面は全面が焼けており、付近から鉱滓が一塊りと鉄片が一片検出された。しかし、この炉址の年代を決める手掛りは得られなかった。上層より湯呑茶碗の破片および和釘が出土した。湯呑茶碗は江戸時代後期に、この地域で焼かれた地方窯の品であると思われる。このことから鍛冶炉址は江戸時代後期以前であることは確かであるが、中世まで逆上り得るかは不明である。

また、この炉址を検出したtronチの周囲にもtronチを設定したが、遺構は検出されなかった。この地点に隣接する上・下の畠地全域にもtronチを設定したが、いずれも地表下50cm位で地山に達し、遺構は検出されなかった。

b. B 地点

所在地 神戸市北区淡河町南僧尾字九田

A地点の南西約200mの所にあり、台地が西から伸びた先端部にあたり、現在は水田が営まれている。この地点から、以前に下田勉氏が縄文時代の石鏃を採集しており、縄文時代の遺構が検出される可能性があるので調査をおこなった。

調査は拡幅工事予定の範囲内に計12ヶ所のトレンチを設定したが、1～3トレンチは地表下40～50cmで地山に達し、水田の床土直下が地山であった。1～3トレンチより一段低くなっている東側の水田に4～12のトレンチを設定したが、北側は地表下20cmで地山となり、8トレンチの南端では1.4mで地山になり、南へむかって低くなっていることが明らかになった。これは自然丘陵の端を埋めて水田にしたためであり、その時の畔杭が3本検出されたが、古い時代の遺構とは関係がなかった。

水田の床土と地山の周層から、平安～室町期の須恵器、土師器、瓦器の小片が若干出土した。器形の明瞭なものは、杯・壺・羽釜等であった。

なお、縄文時代の遺構およびこれらに関連した遺物は検出されていない。（宮本郁雄）

c. 炉跡および

鉱滓

本遺構の位置傾斜面を切って段状に造成したところで、かつて地崩で石垣を積みなおしたときに発見されたものであるが、そのために大部が切りとられていて、原形を推定する資料は発見できなかった。しかし、炉の上部が一部分だけであるが、赤褐色に焼けていて、炉壁と炉床を残していた。それらは粘土質の土がかなりの高温にさらされたものと考えられた。又炉壁のすぐ横のところで、何層にも重なった断面をもった鉄片が採集されたが、土層や位置からこの炉を使用して鍛練した鉄の断片であると思われた。なお炉のなかからは、鉱滓や炉壁に付着した「からみ」などは発見されなかった。

しかし、附近の斜面や水田の畦畔などに、鉄の鉱滓とみられる塊が散布しており、なかに炉壁と思われる粘土を巻き込んだ、いわゆる「からみ」や、ガラス質を多く含有した「のろ」もみられた。^{注1}

資料の観察と分析について

イ. 炉壁付近出土鉄片

たて18mm よこ16mm 厚さ8mm 重さ1.8g

資料は全体にわたって酸化腐蝕が強いが、薄い鉄片が約20層に重ねられていることが観察される。これは鉄の小片を積重ねてわかし付を行なったのち、何度も折返して鍛接してきたえた。鍛治の結果得られたものと考えてまちがいあるまい。

ロ. 「からみ」と「炉壁」の分析

「からみ」は、すぐ近くで下田勉が採集したものを、八木哲三が選択したものを分析した。「炉壁」は今回の調査の折に採集したものである。

分析の結果は別表のとおりであるが、チタンの含有量が少なく、鍛治場であることが考えられ、前記の小鉄片の状態と合せても矛盾がないことになる。

これは、鍛治鍛練においては摂氏1,250度程度の温度は必要とされるが、くり返し鍛造という過程で、素材の鉄に含まれていたチタン等が、逃げるわけである。又「炉壁」には石英質が高温で変化した硅酸などが成生していることがわかる。

以上のように、この遺構は鍛治場の遺構であることが、資料的に結論づけられる。

「からみ」および「炉壁」の分析については、神戸製鋼所中央研究所の援助によって得られたものである。記して感謝の意を表したい。

(なお本文は八木哲三がまとめ、多澤敏樹が加筆したものである。)

注1 「からみ」の状態は、鉄片や銑鉄の小塊などを、炭尖を利用して再鍛造する。いわゆる鍛治の場合によく見られるもので、この場合チタン分が比較的小ない。その量は1%以下のものが多いといわれている。

d. 分析結果

「からみ」および「炉壁」の分析結果

A) 化学分析結果

	T.Fe	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	S	P	Ti
淡河吉川A(からみ)	23.15	11.06	50.72	9.67	1.54	0.93	0.008	0.076	0.42
淡河吉川A(炉壁)	3.24	0.34	66.08	14.52	0.46	0.76	0.006	0.015	0.65

B) X線回折による主要構成鉱物の同定結果

淡河吉川B(ノロ)

石英 ($\alpha - \beta$ 型)、クリストバライト、ガラス相

淡河吉川A(炉壁)

石英 (α 型)、斜長石、加水ハロイサイト、モンモリナイト

D.T.A結果からも加水ハロイサイト、モンモリナイト

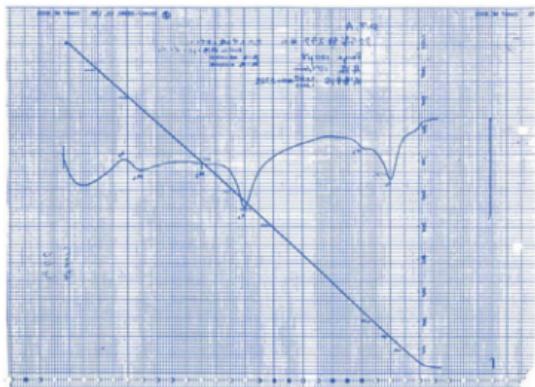
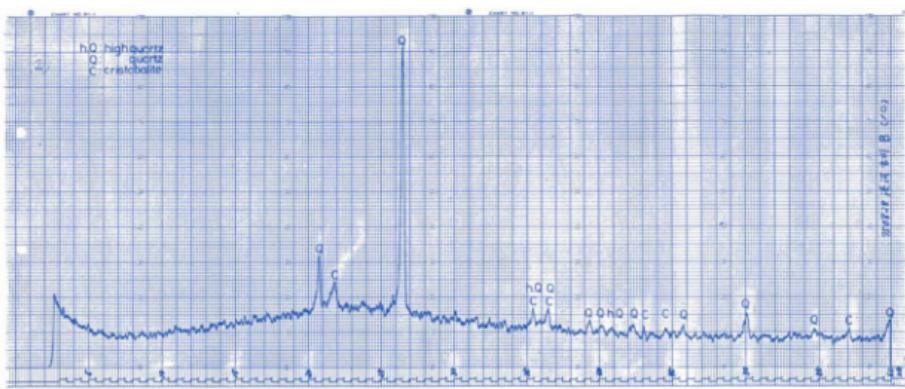
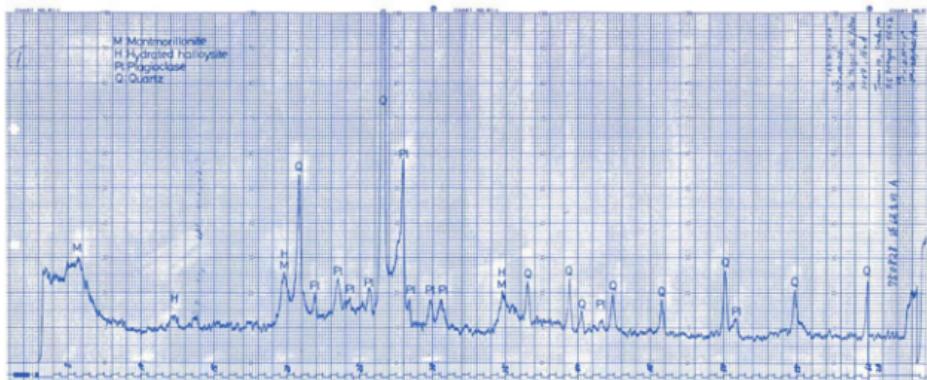
の含有が認められる。この二者は粘土鉱物である。

(注) SiO₂……石英、クリストバライト

Al₂Si₂O₅(OH)₄ · 2H₂O ……加水ハロイサイト

CaAl₂Si₂O₈ と NaAlSi₃O₈ の固溶体をなすものを斜長石と称す。

Al₄Si₈O₂₀(OH)₄ · nH₂O ……この値に近い値を示すものをモンモリナイトと称す。

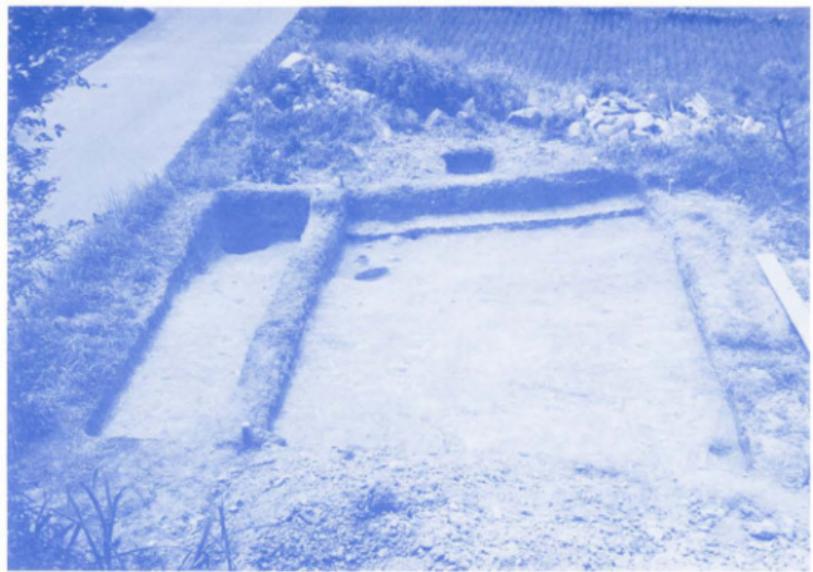




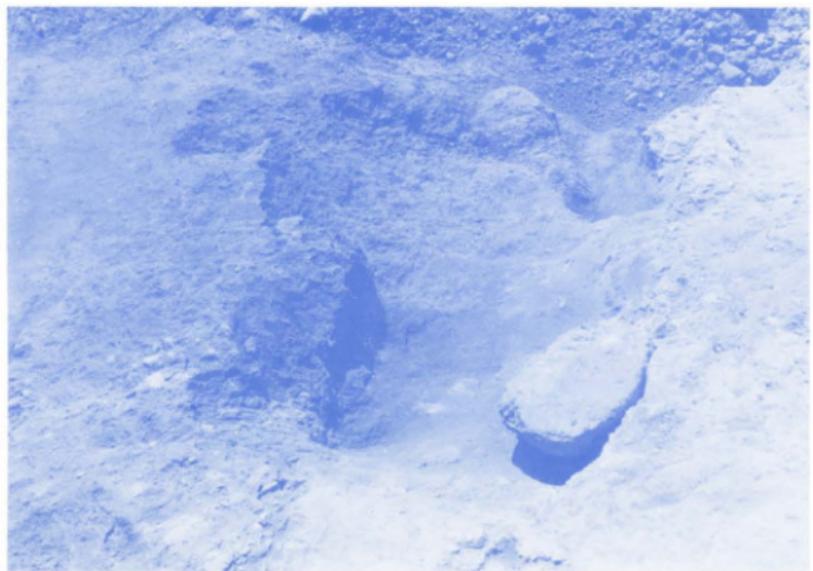
(1) A地点遠景〈南から〉



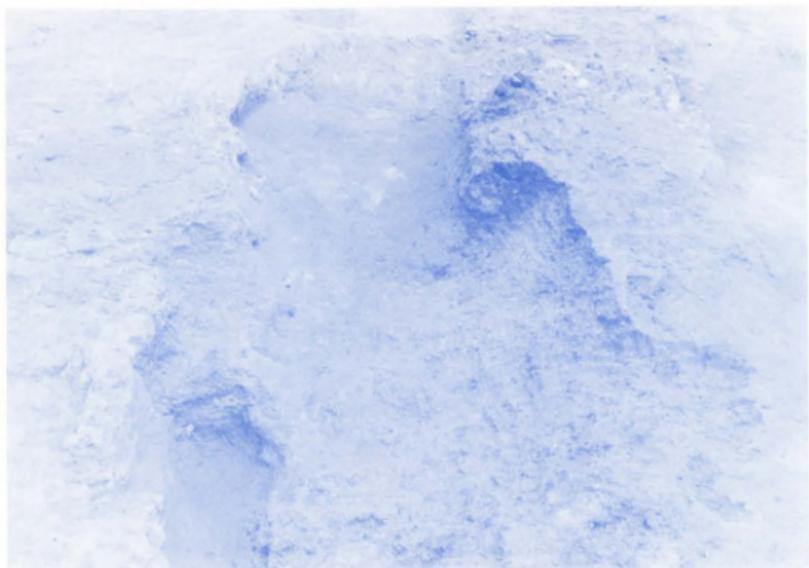
(2) A地点近景〈北から〉



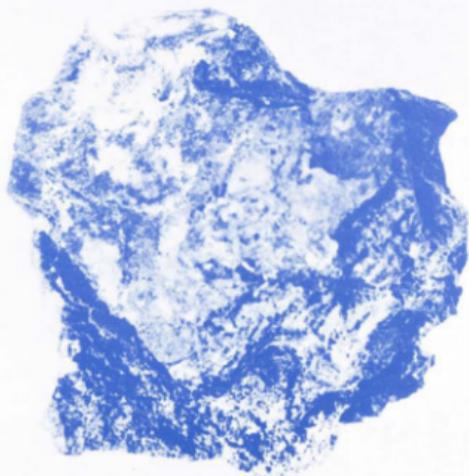
(3) A地点〈北から〉



(4) A地点炉址および焼石〈北から〉



(5) A地点炉址〈南から〉



(6) A地点炉址出土鉄片



(7) B地点遠景〈北から〉



(8) B地点近景〈南から〉



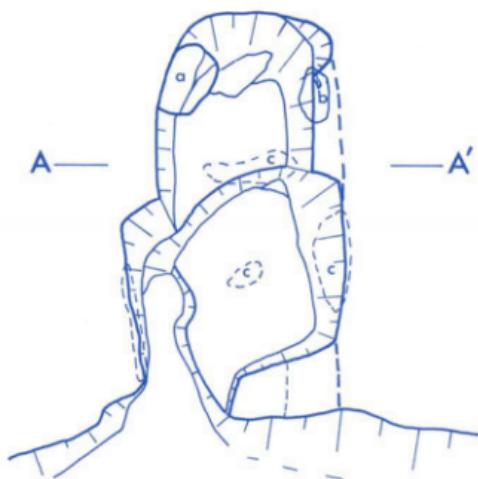
(9) B地点第4～第11トレーナー〈南から〉



(10) B地点発掘風景

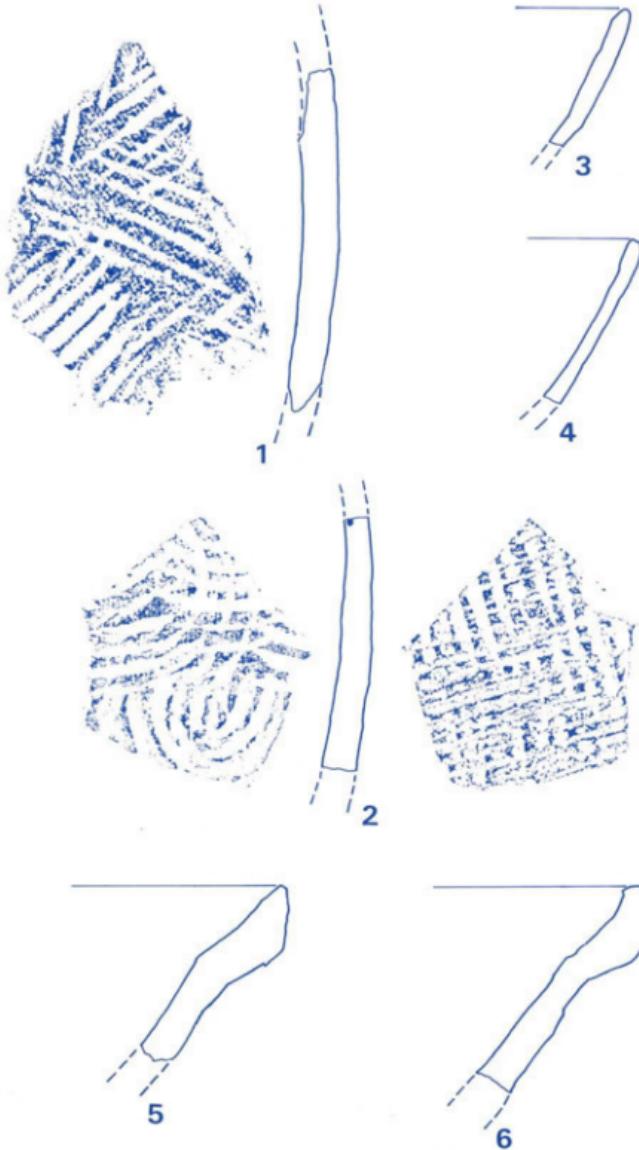


(11) B地点第1～3トレンチ（北から）

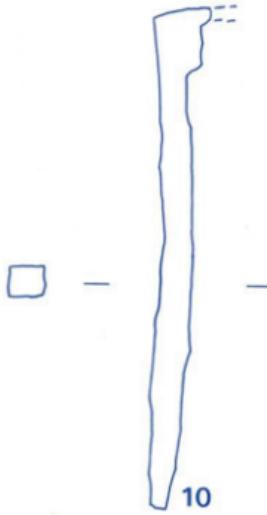
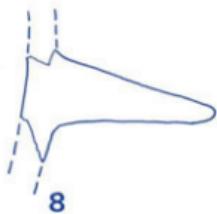
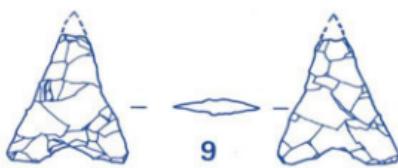


0 5 10m

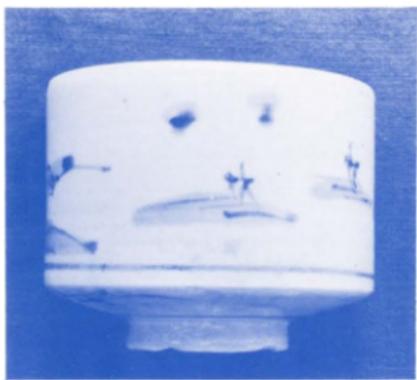
(12) A地点窯址実測図 (aは焼石、bは鉄片、cは焼土)



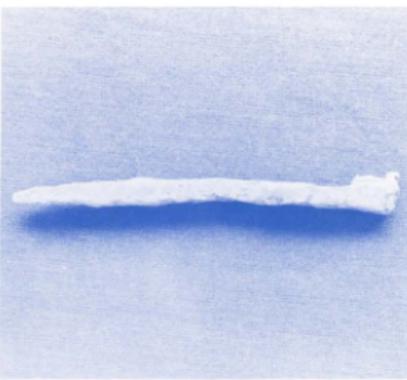
(13) B地点出土須恵器 (1・2は甕、3・4は杯、5・6は片口)



(14) A・B地点出土遺物 (7・8は土釜、9は石鏃、10は和釘、7・8・9はB地点、10はA地点)



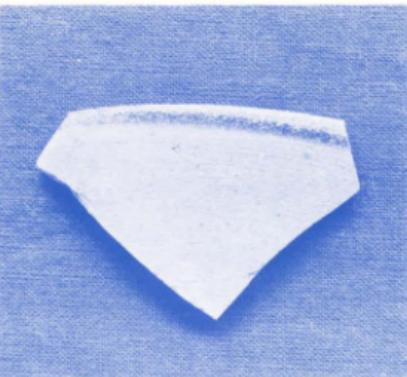
(15) A地点出土江戸時代後期湯呑茶碗



(16) A地点出土江戸時代後期和釘



(17) B地点出土石鑓



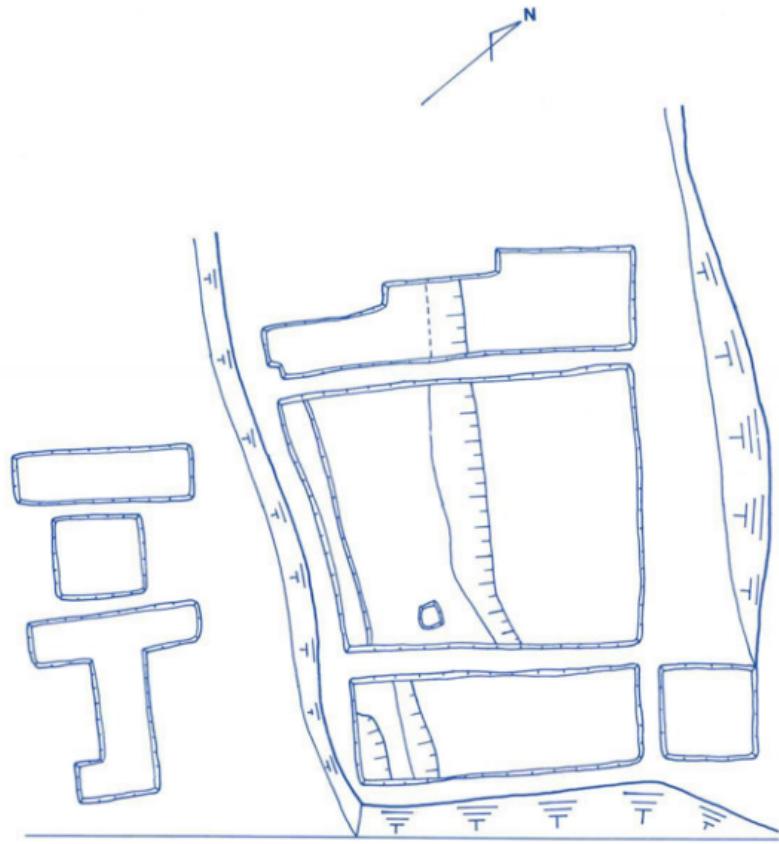
(18) B地点出土須恵器杯片



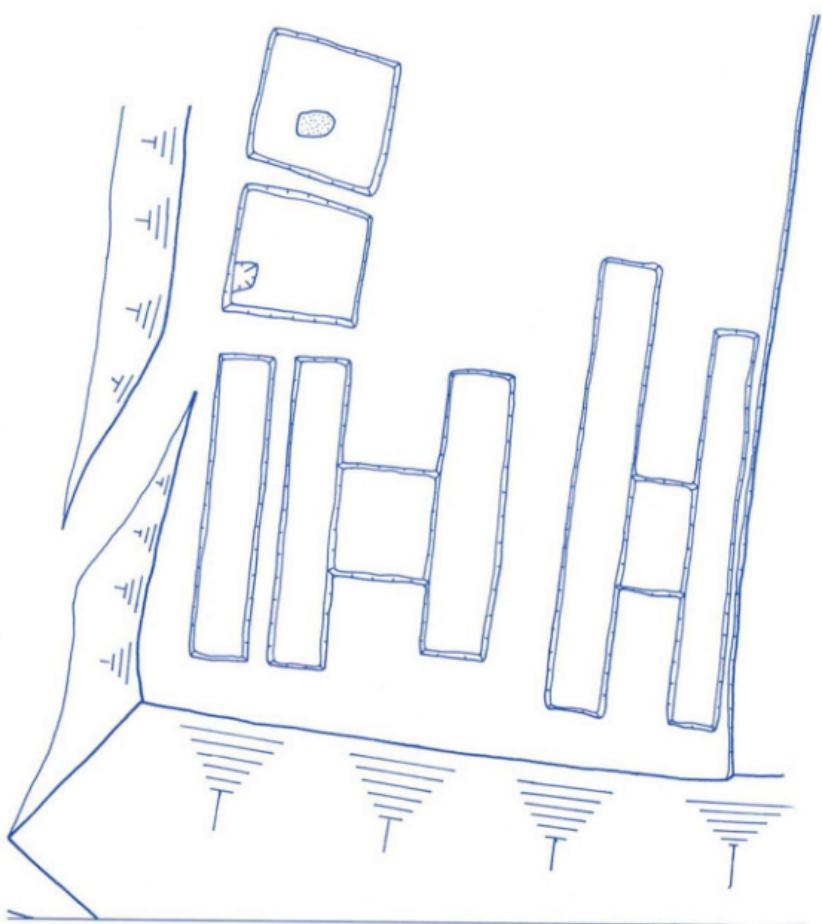
(19) B地点出土須恵器壺片



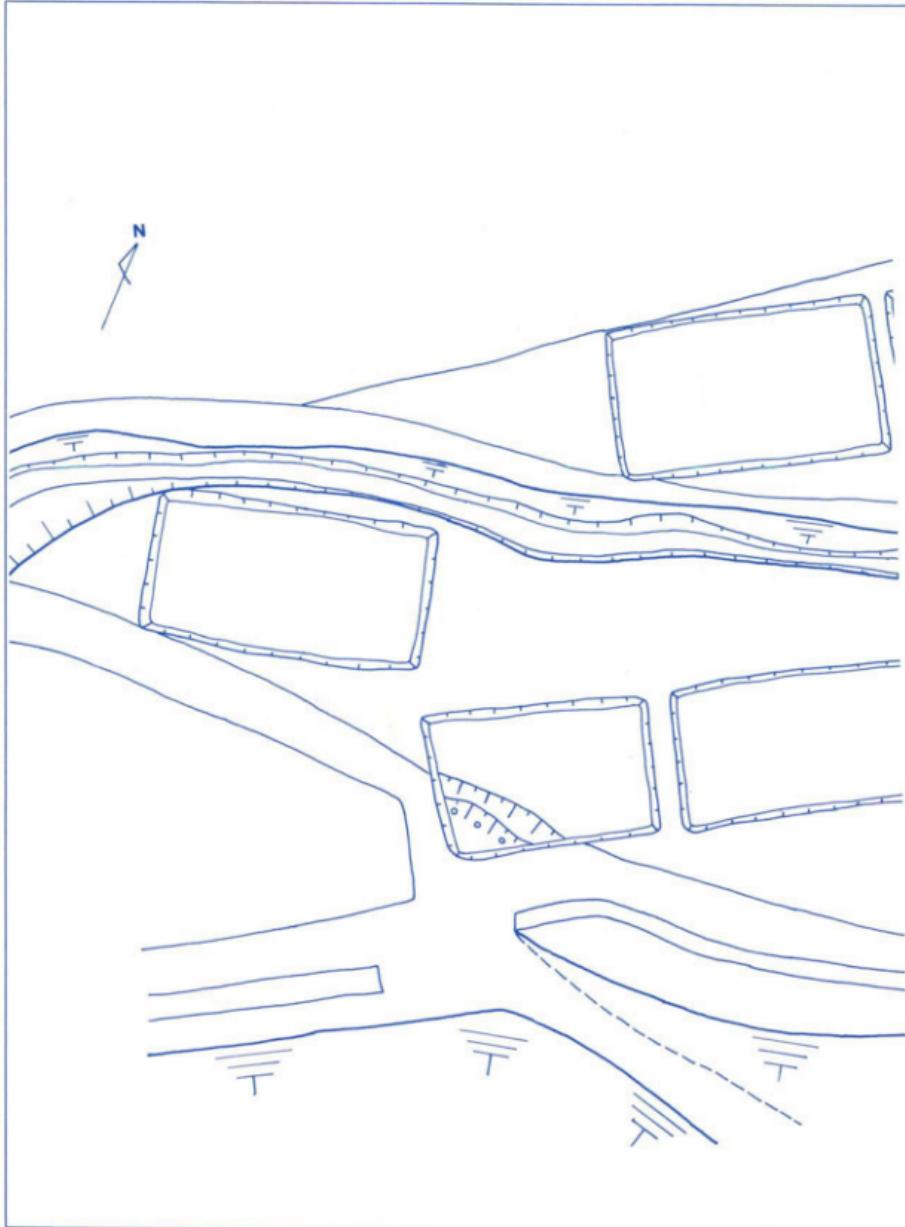
(20) B地点出土須恵器片口片



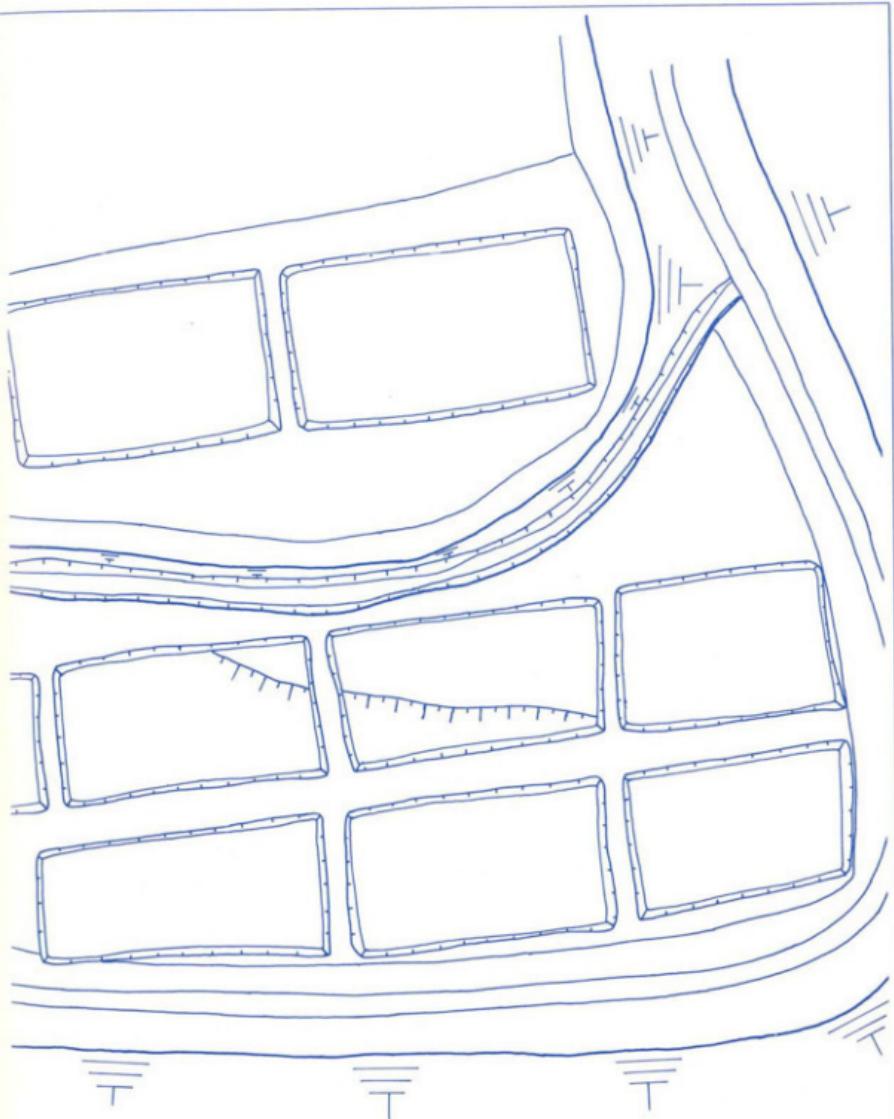
(21) 南僧尾A地点発掘調査平面図



s $\frac{1}{100}$



(22) 南僧尾日地点発掘調査平面図



S = $\frac{1}{100}$

南僧尾 A・B 地点発掘調査概要

編集行 神戸市教育委員会 文化課

発行日 1976年3月1日

印刷 清水印刷所